

佐渡の空家利用による「トキの空の家」プロジェクト

佐渡住環境研究会
(新潟県佐渡全島)



赤玉地区（佐渡島南東部）から
臨む景色

I. 団体の目的と経緯

当会の規約では、会の目的をこう記している。「佐渡住環境研究会は海と山、田畠、川や湖沼、そして森林に恵まれた佐渡島の風土に根ざした暮らしのあり方を求め、わけても伝統と未来をともに見えた住環境や集落景観および周辺里山の保全、創造、活用を目指し、もって自然環境と調和する生活や社会のあり方をひろく提案します。」

つまりこの島の豊かな資源を充分にいかしたライフスタイルを、実践をつうじて創りだしていくことだ。裏返していえば、それだけ活かしきれていない資源が多いと言うこともある。

この会の設立、活動の中心となっているのは、いずれも根からの佐渡人ではない。代表の光井、事務局の十文字とともに、佐渡弁で「タビノモン」と呼ばれる島外からの移住者である。本土で足りないことをこの島に見出し、この島を生活の舞台として選んだ者だ。その志向は「自然との共生」「循環型社会」「スローライフ」といった、今日よくいわれる考え方、言葉の文脈上にあると言ってよいだろう。そうしたことを行るために、適度な広さを持ち、なおかつ四方を海に囲まれた佐渡島は、大いに可能性があるよう見えるわけである。

こうした「新・佐渡人」志望者にとって、最初の障害となるのは住まいの確保である。もちろん、不動産業や行政により提供される賃貸住宅はあるが、それらは一般に賃料が高い。また都会の住まいと同様のつくりのものが多く、先に述べたようなライフスタイルを送ろうとする者にとっては、相応しいものはきわめて少ない。

その一方で、佐渡で目立つのは空家である。住宅地図で確認できるだけでも、約1,700軒の家が、住む人を失ったままそこここにある。実数はもっと多いだろう。伝統的農家のつくりのものも多い。こうした空家はあくまで個人の資産であるが、同時にこれを社会的に活用すべき未利用資源と見ることはできないか。家は住む人がいないといったのも早い。そこに所有者と住み手の利害に一致を見出し、空家の所有者と新規居住希望者とをつなげていくことはできないか。過疎化、高齢化の進展するこの島で、これはきわめて公共的な意味合いを持つ。

会の中心メンバーは、いずれも佐渡への移住の過程で家の確保に苦労し、それでも現在は首尾よく空家を借りて暮らしてい

る。こうした経験から、上記のようなことを考えたわけである。それにくわえ、一次産業をはじめとした求人情報も整理し、空家情報と組み合わせて提供していくといったイメージも、当初から抱いている。

II. 活動の内容

2-1. 今回の活動がめざしたこと



今回の活動に提供していただいた空き家の外観

昨年度もハウジングアンドコミュニティ財団に助成をいただき、行政と連携して「佐渡島における空き民家の維持・活用に関する調査」を行った。その成果をもとに、今回はより突っ込んだ活動を目指した。今年度助成を得て行った取り組みは、主に二つの柱からなる。まず会で空家を一定期間借り受け、島外の若者に住んでもらおうというもの。旅行による滞在よりは深く地域とかかわり、なおかつ定住ほどの決意も準備も要さないというステップを、用意してみようというのだ。そういう中間的な使い方が、空家の活用法としてあり得るのではないか。島内でも中央の国仲地域以外は総じて過疎化、高齢化が著しい。たとえ定住でなくても若者が外から入ることは、集落にとっても良き刺激となることが考えられる。

二つ目としては、未利用の地場資源の活用である。具体的には二つの「かき」、すなわちおけさ柿の間引き果、および養殖牡蠣の殻だ。島の特産であるおけさ柿は、収穫までに未成熟の青柿をかなりの数、間引く。これを使って近年再評価され始めた「柿渋」をつくってみる。また島内では加茂湖など牡蠣の養殖が盛んだが、牡蠣殻の行き場に困っている。これを使って、やはり近年再評価されている「貝灰塗喰」をつくってみる。

前者の空家での生活体験は、棚田の耕作をはじめとした農的環境の担い手確保までを展望して行うものである。トキの野生復帰も、こうした若者の里山・棚田への復帰を前提としてこそ成り立つにちがいない。また後者の牡蠣殻と貝灰は、エコロジカルな建材として空家のリフォームをはじめとして利用されることを望む。面白いことに貝灰の少量の柿渋を混ぜると、ほのかにトキ色をした壁材となる。このようなことから、この二つの柱によって行う今回事業を「トキの空の家プロジェクト」と称したわけである。

<空家居住体験>

両津市では、昨年度の当会との共同作業の成果を生かし、今年度からホームページによる「空家情報提供システム」をスタートさせた。それを利用し、今回の事業に賛同してくれる空家の所有者をみつけた。前浜（島の南東岸）の一角、赤玉地区の民家である。

一方、住んでくれる若者については、a. 当会と交流のある主に在京のNPO、 b. 島内でトキ野生復帰事業を行っている新

潟大学、c.島内の環境を話題とするメーリングリストや口コミを通じて募集した。結果、新潟大学の院生である藤田桂介さんが手を上げてくれた。居住体験終了後、彼が寄せてくれたレポートを以下に掲げる。

佐渡赤玉に住んで

新潟大学大学院自然科学研究科
藤田桂介

私は平成15年7月から12月まで佐渡赤玉の空家に住んだ。佐渡に来た当初は大学の施設で寝泊りしていたが、そこでは地元の人との交流は少なく物足りなさを感じていた。そんな中この「トキ空の家プロジェクト」の話を頂き思い切って7月から赤玉で生活することにした。

なぜ私が赤玉に空家を借りたかというと私の研究の調査地に近いことが一番の理由である。私はトキの営巣木であるナラ類の集団枯死の研究を行っている。特にトキに関連する事業は地元の理解が必要になるので、地元の考え方や意見を聞くことでそれを研究に生かしていくのではないかと考えたからである。またせっかく佐渡にいるので佐渡の文化や人々との交流をしたい気持ちがあった。

実際に空家に住んで驚いたことは家が広いこと。12畳の部屋が3部屋、6畳が3部屋と仕切りをとれば冠婚葬祭ができる造りになっているが、実際に私は2部屋のみ使用した。夏はとても快適でクーラーは必要なく、窓を開けておくと心地良い風が入ってきた。目の前は海、まるで絵葉書の中にいるようだった。しかし家が広い分掃除が大変で、3日間ほど留守にすると部屋中ネズミの糞だらけになったり、湿気が多く部屋の換気をしないとすぐにカビが生えてしまうこともあった。空家を放置しておくと家が傷んでしまうので家を使い続けることの重要性を感じた。冬は天井が高いので熱効率が悪くとても寒く感じた。

楽しいこともあった。区長さんと一緒に全世帯に挨拶回りをした際、「若い人が来てくれた」と喜んで頂いたのがうれしかった。その後野菜をたくさん頂いたりお風呂をお借りしたり、お食事に招いて頂いたりと歓迎を受けた。ほとんどの家には年配の方しかおらず、子供は数人で若者はみんな両津市や佐和田町に住んでいると聞き、島内でも過疎化が進行していることがわかった。地元出身の若者に誘われて野球チームに入ったり、地元の会合や前浜地区合同運動会にも参加させてもらった。運動会では学校と地域が合同で運営し一緒に食事やお酒を飲みながら競技に参加したり応援をした。子供達は地域の方に見守られながら成長していると感じた。佐渡の魅力はやはり海の幸。イカを釣ったりタコや鮑を頂いたりと普段味わえない海の幸をご馳走になった。

短い間だったが地域との触れ合いを通して人の温かさを再認識できた。空家の魅力は豊かな自然環境の中で地域の方との交



藤田氏が作業をしたトキ野生復帰フィールド



藤田氏も参加した赤玉地区でのバーベキューパーティ

流を通して地元の野菜や魚介類等を頂き、毎日健康的な食生活を送れることではないだろうか。また、普段何気なく使っている「挨拶」が地元に溶け込むためには一番大事であることを改めて感じた。ここで自分の生活を振り返ることができ、今後の生活に生かしていけたらと思う。この活動がさらに広まることを希望する。



柿渋の材料 おけさ柿の間引き果



柿は洗って細かく切り、ミキサーにかけ絞り寝かせる

以上が藤田さんのレポートだが、いくつかのルートで当会に伝わってきた集落側の評判も、至って良好だったようである。なお、ひきつづき冬期の居住体験者を募集したが、結局みつからなかつたのは残念だった。

<トキ色の壁づくり>

空家を直しながら住んでいるメンバーで、漆喰に少量の柿渋をまぜて塗った壁を「トキ壁」と称している者がいる。それを発展させ、島内の柿と牡蠣で地場産のトキ壁を作つてみることにした。まず青柿は、島内の環境関連の話題をあつかうメーリングリストで求めたところ、すぐに入手できた。これを切り、絞り、ポリバケツに詰めて寝かせておく。一年の発酵を経て使えるのだが、仕込みから約8ヶ月を経た現在の状態は順調のようである。

一方、貝灰の方は文献や専門家の助言を得て、簡易な焼成窯を試作。材料は加茂湖の養殖牡蠣殻である。一部熱の通りが悪かったものの、おおむねうまく焼きあがった。

今夏の柿渋の発酵完了を待つて、島内産「トキ色の壁材」が出来上がる予定である。

<活動にあたって>

これらの活動はすべてゼロから始めたわけではない。前年度の空家調査をふくめ、それまでにメンバーが培ってきたノウハウやネットワークの上に乗り、それぞれの関心事や問題意識の延長線上に組み上げたものである。それぞれの公と私、そして多分野の活動が密接に関わりあってこそ力は發揮できる。

たとえば佐渡移住にあたっての空家探しの苦労が、空家活用というテーマに結びついたことは先に述べた通りだ。また、メンバーの一人は秋における柿選果場、冬には加茂湖の牡蠣養殖の仕事をしている。それらを通して島内の柿生産の状況や牡蠣殻処理の問題について、意識を深めた。そのことが柿渋と牡蠣殻による壁材づくりの背景としてある。

さらには在京N P Oや新潟大学、島内の環境問題に关心を寄せる人たちとのつながりも、以前から培ってきたものである。

とはいものの、他に仕事そして家庭を抱えての活動は、何にしろ楽ではない。そこでこうした活動は当面ボランティアで

あっても、いずれ人件費をふくめ採算性のある事業として成り立つ可能性を見出したい。社会的に必要とされる活動は、社会が支えてこそ継続性が保証される。ただし資金の流れをふくめ、社会が支える仕組みが出来上がるまでにはながいタイムラグがある。その間は、ボランティアとして生きる他はない。私達の活動も、そういうものの一つだと考えている。

ただし、こうした展望のみで活動に踏み出せるのは常に少数である。本人以外の、家族など周囲の人が負担を感じることもないとは言えない。そこで例えば赤玉の家でのバーベキュー会に家族ぐるみ参加するなどした。家庭の理解をはかることは大切である。

III. 活動の成果

成果としてはつぎの三点があげられる。まず、空家の短期居住利用が、空家、地元、滞在者それぞれにとって有意義であることが確認できた点。今回の取り組みでは空家所有者、地元集落、そして短期居住した若者のいずれからも、感謝の声が寄せられている。空家所有者にとっては公益的な試みに寄与できしたことや、短期であっても人が住むことが空家維持にとってプラスであること、過疎化、高齢化に直面する集落にとっては今後に向けての良い刺激になったこと（こうした取り組みを今後もつづけてほしいとの声が寄せられている）、そして若者にとっては貴重な経験が出来、大きさにいえば今後の人生の選択肢が増えたということが、その主たる理由としてあるようだ。

成果の二点目としては、空家の活用法として各方面にアピールし、その過程で関係作りが進んだという点がある。居住する若者を募る過程で、よこはま里山研究所との協働をはじめ在京N P O、また新潟大学との協力関係が進展した。一方、マスコミ（新潟日報、朝日新聞、FM新潟）でも紹介され、行政をはじめ、Iターン、Uターンを促す手法として各方面からひろく注目を集めた。今後の展開にとっての新たな基礎となる実績をつくることができた。

三点目として、トキ色の壁材つくりについて、技術的に一定のメドが立ったということ。既製品を使っての壁塗り、地場産品の青柿と牡蠣殻を使っての試作ができたことで、今後に向けてのステップを踏むことが出来た。

IV. 今後の取り組み

今回の成果を踏まえた、今後の課題および展望はつぎの通りである。まず空家を活用した短期居住は、これからも機会をとらえて継続してゆきたい。たとえば新潟県ではIターン、Uターン促進のための事業を奨励しており、こうした予算枠を使い行政と協働して行うことが考えられる。また佐渡には、在京を中心とした多くのN P Oが関わりを持っている。それらとの



今回提供していただいた
空き家の内部

ネットワークづくりも進めたい。今回はいささか準備不足のまま臨んだわけだが、これを初発とし、「島でちょっと暮らしてみたい」という若者を募るシステムを定着させてゆきたいものである。

さらに島内で木質ペレット燃料を生産する動きがあるなど、バイオマス資源活用の機運は今後ますます盛んになると予想する。トキ色の壁材のみならず、例えば空家にペレットストーブを置くようなライフスタイルの提案なども考えている。そうした取り組みも、各地のNPO等と連携して進めてゆく。トキ色の壁材づくりに関しては、島内で牡蠣殻の処理が社会問題化している。そこで長期的には貝灰漆喰生産の事業化も描きつつ、当面は有志によるワークショップ形式での作成、さらには体験教育の素材としての活用を考えている。ちなみに貝灰焼成の熱源は、かつては松葉、現在は重油が一般的である。これを木質ペレット燃料で行うことも、可能性の一つとしてあるだろう。

佐渡という島は、社会的問題の顕在化のみならず可能性の潜在においても、日本の縮図であると私たちは考えている。こうした自覚をエネルギー源に、これからも活動をつづけてゆきたい。